ミンガラバー こんにちは

認定 NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0815
岡山市北区野田屋町2-4-18
TEL：086-224-0102
FAX：086-221-2554
URL：http://www.mjcp.or.jp

協会10年

祝賀会に110人

認定NPO法人「日本・ミャンマー医療人育成支援協会」が今年、設立10周年を迎えた。その祝賀会が7月30日夕、岡山市中区の岡山プラザホテルであり、招待者を含めて会員ら約110人が集まり、節目の年を祝った。

理事長「皆様の力のおかげ」

岡田茂理事長が10年を振り返ってこの間の活動にふれ、「これも皆様の力のおかげ」と感謝の挨拶。ミャンマー伝統の「水祭り」の踊りを留学生が披露した。

森田潔・岡山大学長の発声で乾杯。大塚愛二・岡山大学医学部長と森健太郎・岡山商工会議所国際委員長（岡山学芸館高校長）の祝辞をまじえて約2時間、出席者は親睦を深めた。

10年の歩み　本に

活動10年の記録をまとめた本を、協会が「ミンガラバー特集号」として出版。

主な活動内容を年ごとに記事と写真で紹介。支援にまつわる思い出を14人（うちミャンマー4人）が寄稿している。日本と世界の年表をつけ、ミャンマーの出来事も載せている。

表紙、中扉、裏表紙と巻末の写真計22点はミャンマーの日常を撮った槇野博史・岡山大学病院長の作品。

A4版、65ページ。協会では全会員と、これまでの活動に協力してもらった医療機関や関係団体、さらにミャンマーの医療関係者らに配った。

医療工学士の育成へ 手術指導などは継続

総会　事業計画決定

講演に耳を傾ける協会員ら＝岡山プラザホテル

祝賀会に先立って、協会の総会が開かれた。15年度（15年7月―16年6月）の事業報告と収支決算、16年度（16年7月―17年6月）の事業計画と予算案を承認した。

16年度の事業計画では、ミャンマーには医療機器のメンテナンスにあたる人材がいないため、その医療工学士の育成研修を行う。医学研究大会への参加、手術指導、補助助産師の育成、口腔がん検診など、これまでに行ってきた事業は引き続き実施。貧困地区へのクリニック寄贈を募集する。

総会の後、春日孝之・毎日新聞編集委員が「おまじないとミャンマー政治」という題で講演。4年間現地で取材した経験をもとにミャンマーの政治には占星術や黒魔術が深く絡んでいることを具体例に触れながら話した。

「例のない活動」

日本ミャンマー協会長

最後に日本ミャンマー協会の渡邉秀央会長（元郵政相）が挨拶し、「この岡山のような素晴らしい活動は他に例がない」と讃えた。

ミャンマー観察記

おもてなしに小躍り

広告・企画・出版「ビザビ」部長　草薙　千尋

ミャンマーの5月。朱色の鳳凰花が咲き誇っていた＝ヤンゴン医療技術大学構内

5月に4日間、視察団に参加させていただいた。これは、初めての「ミャンマー観察記」です。

ヤンゴン空港に降り立ったのは夜だった。扉が開くと同時に、暗闇から湯気のような熱気を感じた。「圧力さえ感じる暑さじゃが…」と思った瞬間、タクシー待ちの人たちが眼に入った。ロングスカートのような民族衣装を着た人、日本人と同じような格好をした人、浅黒く彫りの深い顔、平面的な顔、中国人と思わせる風情の顔とファッション。人々の表情といでたちは様々だった。

後で通訳の方に聞いたところ、ミャンマーには大きく8つ、全体で135に及ぶ民族が存在するとのこと。この国は私の想像を軽々と超える多民族国家だった。

翌朝、明るい光の下で見る初めてづくしのミャンマーは“カラフル”だった。青すぎるほどの空、垣間見える寺院の輝く黄金色、生い茂る樹木の濃すぎる緑、咲き誇る朱色の鳳凰花、お坊さまの法衣は鮮やかな山吹赤茶色。そして女性の褐色の頬に、なぜか刷毛で塗ったような白い粉。

タナカという日焼け止めとか。日本の苗字のような名前にもびっくりしたが、日本女性は日焼け止めをなるべく浮き上がらないようにするのに、ここではこれ見よがしに日焼け止めを浮き上がらせていた。

伺う先々でミャンマーのお茶とお茶菓子をふんだんにごちそうしていただいた。最初は「すごい！こちらの病院は私にまで」と内心小躍りしたが、最終日の最後の訪問先まですべて温かいおもてなし。お茶は甘く濃く、キャラメル並みで、一口飲むとお腹が満たされる。傍らには常にスイーツが添えられていた。

おやつに触れたからには、料理も紹介しないと…。

いただいたミャンマー料理は、タイ料理と中華料理のいいところをミックスしたようなイメージ。タイの香辛料と中華のうま味が感じられて、野菜中心でどれもが私好みの味わいだった。連日40度を超えているにもかかわらず、元気に過ごすことができたのはミャンマー料理のおかげに違いない。それに合わせるミャンマービールの美味しさは、このミンガラバーでも皆さんが太鼓判を押しているので深く触れないが、たしかに絶品だった。

豆知識をひとつ。ミャンマー人の名前は、伝統的に必ず生まれた曜日がわかるように名付けられる。後日確認したところ、曜日に因んだ文字を頭文字に使うらしい。その曜日に生まれた人がお参りする守り神がおられる。最近のミャンマーの若い夫婦はそのことを守らず、日本でいうところのキラキラネームのような名前をつけることがあるらしい。その結果、両親にこっぴどく怒られる。「いずこも同じですね」と通訳の方と笑い合った。

ミャンマーの空気を全身で吸って、見て、食べて、飲んだ。その時に感じたカラフルな感覚を反芻しつつ、今後も伸びゆくミャンマーを見ていきたい。

◇

草薙さんが参加した視察団は伊野英男・岡山大学教授、出口隆一・旭川学園長、小野淳一・川崎医療福祉大学講師ら総勢30人。ミャンマーでは医療機器を扱う技術者が少なく、その専門家を育てるための調査に、ヤンゴンの医療系大学や総合病院を訪れた。

交換学生体験記

ヤンゴン第一、第二医科大学の学生8人が4月に3週間、岡山大学医学部へ。一方、岡山大学医学部の学生3人も7月に1週間、ヤンゴンの両大学へ。大学間で結ばれた学生交換協定に基づく交流第1号で、ヤンゴンからの旅費や滞在費などの半額は協会が負担した。
学生4人の体験記を紹介する。

得た繋がり、次へ

岡山大学医学部
医学科4年　神浦　真光（まこ）

私にとって本当に素晴らしいミャンマーでの研修でした。出かける前は、学生同士の交流と、大学の授業、あとは形成外科の先生方の手術を少し見学できればいいかなと、それぐらいに考えていました。期待よりもむしろ、不安の方が大きかったのです。

最初は向こうの学生のプレゼンを聞いたあと、教授を交えて学生同士で質疑応答をしました。緊張もしたし、やはり不安は募る一方。その後、1対1、2対2などで話し、長い間一緒に過ごすうちに、いつの間にか緊張もほぐれて自然と対話できるようになっていました。

驚いたのはミャンマーの学生のホスピタリティー。私たちを迎え入れてくれた彼らは、500人はいるクラスの中の最も優秀な人たちでした。私たちが滞在中は、授業を休んでまで、ずっとつきっきりで色んな場所を案内してくれました。おかげで小児病院、新ヤンゴン総合病院、地域のクリニック、ヤンゴン第二医科大学など、期待していた以上に様々な所に行くことができました。また、彼らの口添えもあって、行く先々で、トップの方とお話しもさせていただきました。向こうのトップの方々は全員とても優しく親切でした。小児病院の先生は、わざわざ患者を院長室に呼んで、診察や診断のレクチャーをしてくださいました。自分たちだけでは決してできない、本当に貴重な体験をしました。

何かを学びたい、何かをしたい。そう思った時、現地での繋がりが非常に重要であることを強く感じた1週間でした。ここで得た繋がり、経験を私たちだけで終わらせてしまうのではもったいない、というのは学生双方の一致した意見です。

今回は、お互いの国の大学のシステムや、医療のごく浅い部分のことしか意見交換ができませんでしたが、次はどうしたら自分の国の医療が良くなるか、良い医療とは何か、もっと深い意見交換をしたいと思います。

素晴らしい経験ができたのは協会の岡田茂先生、また木股敬裕教授を初はじめとする岡山大学形成外科のミャンマーとの繋がりがあったからこそです。この経験を無駄にすることなく、次に繋げていきます。

㊤グループ学習の合間に＝岡山大学医学部
㊧たこ焼きパーティーの後で

ミャンマーの学生と一緒に。左から3人目が神浦さん。左側2人も岡山大学生＝ヤンゴン第一医科大学

すべてが新しい経験

ヤンゴン第一医大　エイジンミン

私たち8人は、岡山大学医学部3年次生の「基礎病態演習」3週間コースに出席する交換学生に選ばれました。コースは4月4日に開始。私にとって最大の経験、素晴らしい時間、美しい記憶の始まった時でした。

5つの英語グループに分かれ、各グループには8人の学生がいて、日本人と外国人の先生、それにミャンマー人の大学院生が指導助手として加わりました。グループごとに異なった主題を勉強。遺伝性ヘモクロマトーシス、心筋梗塞、脆弱X染色体症候群、ビタミンB12欠乏症と家族性高コレステロール血症などでした。私のグループは心筋梗塞。コースの最後には発表を義務づけられました。

グループ学習に加えて岡山の友人たちとは多くのパーティーを楽しみました。日本の伝統料理も沢山いただいた。少しばかりの日本語や日本の文化にも触れることもができました。

週末には友人たちはあちこちに連れて行ってくれました。広島、宮島、京都などです。

日本での3週間はすごいことで、私たちにとってすべてが新しい経験でした。本当に素晴らしい方々に出会い、新しい友人ができ、相互の文化を交換し合い、チームワークを楽しみました。さらに、このプログラムを通して、人々の前で発表する勇気を頂きました。日本の友人たちも同じだったであろうと思います。

岡山大学の先生、助言者、学生、それに学生の国際医療勉強会「ILOHA」のメンバーに心からお礼を申し上げます。私は日本が大好き。岡山が大好き。

私が入れ替わった

ヤンゴン第二医大　リンポンウー

日本の学生は時間の使い方が上手なことを知りました。医学の勉強はそれ自体、大変なのに、多くの学生は課外活動にも熱心。アルバイトで稼いでいる学生もいる。これが私に活力を与えくれました。「自分も活動的になろう」と、よいモチベーションとなりました。

日本の友人から学生団体「ILOHA」を紹介されました。メンバーは様々な社会的、環境的な問題に取り組んでおり、熊本震災でも被害者救済にボランティアとして参加。この協力姿勢に私は本当にびっくり。私もミャンマーに帰ったらこのような組織を作りたいと考えるようになりました。

基礎病態学演習で、私のグループは脆弱X染色体症候群の発表をしました。とても難しい内容でしたが、一緒に学習することで共同作業の重要性を学びました。

日本での生活は「時間」の尊さを教えてくれました。日本の人たちは時間を大切にします。だから、すべてが時間通りに進みます。汽車、バス、会合などもそうです。

私は、私自身が入れ替わった、と感じています。この特筆すべき体験によって得たものを本国にもたらすのは私の義務だと思っています。

この体験を後輩に

ヤンゴン第二医大　ニャンラインブウワ

私たちのグループのテーマは「家族性高コレステロール血症」。最初はこの内容について知っている学生はほとんどいなかったが、いくつかの小項目に分け、手分けして深く勉強。与えられた文章を読み、文献を探して、教科書も読みました。すべての学生がこの病気の全体像について理解できるようになりました。何もかも先生が教え込むミャンマーの勉強法とは全く異なるものでした。私は自己学習、責任、そしてチームワークについて学んだ気がします。

このコースには薬理学の研究室で勉強することも入っていました。岡山大学病院の見学もしました。この病院が患者とそのための医療技術が一体となっていることに驚きました。

私が学んだ最も重要なことは日本人学生が自立しているということ。思いやりの心も持っていました。私は日本人学生のような活発なライフスタイルを始めたいと思うようになりました。

違った文化、異なったライフスタイル、時間の重要性（日本の学生は時間を守ります）を学んだという点でとても有益でした。これからも第二医科大学の後輩たちを招待して下さるようお願いします。彼らにとっても強い動機づけになると私は強く信じています。

協会だより

新理事に氏家教授

7月に氏家良人・川崎医科大学教授が協会理事に就任した。前岡山大学教授で、救急医学が専門。退任した小熊恵二理事（元岡山大学医学部長）の後任。

編集後記

十年一昔という。手元の辞書を引くと「10年を一区切りと見て、その間にも大きな変化があるものだということ」（広辞苑）とあります▼今号と一緒にミンガラバー特集号「活動の10年」をお届けしました。この編集後記に、こんなに多彩で充実した活動は設立時には思ってもいなかったことであり、「うれしい想定外」と書きました▼まさに十年一昔。当初からの理事のひとりとして、感慨ひとしおです。（西﨑）